

賀茂の葵祭と臨時祭の盛衰と復興に学ぶ

京都産業大学名誉教授

所功



江戸時代から「葵祭」とも称される賀茂祭は、平安王朝の昔から京(宮のある処)の「まつり」を代表する勅祭として名高い。それは、長らく旧暦の四月中西日、明治から今日まで新暦の五月十五日を中心に行われている。

それには多様な人材と多彩な装束類および多大な費用を必要とする。たとえば、鴨脚家文書所引「延喜儀式」逸文によれば、平安宮から立つ勅使列と齋院司から出る齋王列を合わせると八五八名にもぼる。

一

そのため、朝廷の政治経済力が衰えると、すでに承久の変(一二二一年)で齋院が廃絶

きの日有るべし」との再託宣があった。

その後、高齢で擁立された父君(光孝天皇)が在位三年半で亡くなり、急に二十一歳で即位することになった宇多天皇は、これを「鴨明神の託宣の徴驗」と思い至られた。

そこで、即位三年後の寛平元年(八八九)十一月己酉(二十一日)、勅使の藤原時平が「走馬並びに舞人等」と鴨社に向ひ、社頭では「幣を捧げ」ている。これが「賀茂臨時祭」の初例である。次代の醍醐天皇朝から「恒例に臨時の使を奉る」(外記日記)ようになっても「臨時祭」と称し続けられた。

三

この臨時祭には、齋王の参向も事前の御禊もない。しかし、十一月下酉の当日、宮中の勅使発遣の儀、社頭の祭儀、夜半の宮中「還立」の儀など、四月の賀茂祭と変わりない(道中の行列は小規模)。そのため、徐々に励行が難しくなり、心仁の乱後中断を余儀なくされ、元禄七年にも復興できなかつた。

四

それを何とか再興しようと発願して実現されたのが閑院宮家出身の光格天皇(在位一七七九〜一八一七年)である。即位二十三年目の寛政十三年(享和元年(一八〇一))ころの「宸筆御沙汰書」(京都御所東山御文庫

し、やがて応仁の乱(一四六七〜七七年)以降、路頭の行列は中断のやむなきに至つた(社頭の祭儀は細々とでも続いている)。

それが、江戸時代に入つて、幕府の統治が安定し、朝幕関係も徐々に好転するなかで、霊元天皇(在位一六六三〜八七年)を中心とする朝儀復興の熱意が実り始めた。そのひとつは、約二百年ぶりに貞享四年(一六八七)再興された東山天皇の大嘗祭である。

二

葵祭に関しては、上下両社の祠官が賀茂伝奏と武家伝奏から京都所司代を通じて幕府に働きかけ、元禄七年(二六九四)、約二百年ぶ

御物、拙著「光格天皇関係図集御成」に全文収録)に、次のごとく仰せられている(原漢文を書き改めた)。

「石清水八幡宮・賀茂皇太神宮は、吾が邦無比の宗廟、累代朝家の崇敬、他に異なる者なり、往年恒例及び臨時の祭祀あり。而るに中絶の後、恒例祭は両社同じく再興され：臨時祭は：再興なきの条、その恐れ実に少からざる者なり。：斯の如き懇篤志願の意旨、執柄(撰関)は勿論、両伝(二名の武家伝奏)等、深く思惟を加へ篤く勘弁を擬し、厚く(京都)所司代に談じ、成就を以て専要の事と為すべし。」

この御沙汰書を承つた関白鷹司政熙や武家伝奏が京都所司代に働きかけを続けた結果、文化十四年(一八一四)の十一月己酉、約三五〇年ぶりに再興された(石清水臨時祭は前年再興)。しかも、その内容を伝える「賀茂臨時祭絵巻」と別冊記録がある(京都産業大学図書館所蔵)。

五

ただ、せつかく復興されてから五十余年後の明治三年(一八七〇)臨時祭は廃絶されるに至つた。以来一五〇年経た今日、再び復興することは不可能に近いであろう。けれども、光格天皇の御沙汰に明記されていた石清水と賀茂の両社に対する格別な「崇敬」は、今後とも末永く大事にして参りたい。



プロフィール

所功 ところ いさお

昭和十六年(一九四二)二月岐阜県生まれ。名古屋大学史学科・向大学院修士課程卒業。皇學館大学助教授・文部省教科書調査官を経て昭和五十六年より京都産業大学教授。法学博士(慶應義塾大学、日本法制文化史)。平成二十四年より京都産業大学名誉教授、モラロジー研究所教授。主な著書に『京都の三大祭(角川ソフィア文庫)』『伊勢神宮』(講談社学術文庫)『平安朝儀式書成立史の研究』(国書刊行会)『菅原道真の実像』(臨川書店)『皇室典範と女性宮家』(勉誠出版)、『皇位継承のあり方』(PHP新書)、『天皇の「まつり」と』(NHK新書)、『代表編著』『昭和天皇の大御歌』、『皇室事典 令和版』(角川書店)、『日本年号史大事典』(雄山閣)など。